

言語文化教育研究学会[ALCE]

「言語ゲームと暴力原理」

——「欲望論」哲学の展望

竹田青嗣

20180130

1) 言語ゲームと暴力原理

2) 言語ゲームと現象学

3) 言語ゲームと価値審級形成

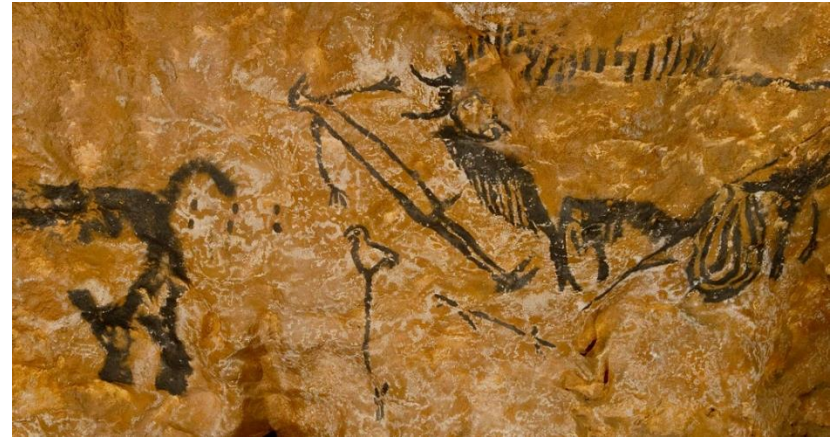
1) 言語ゲームと暴力原理

*ミルチャ・エリアーデ

《人間は「時の始めに」なされた決定、すなわち、生きるために殺すという決定の最終的所産である。》（『世界宗教史 I』）

*ジョルジュ・バタイユ 『エロチシズム』

→ラスコーの壁画は殺害と贖罪の儀礼的意識
《私のこの仮説は次の事実に依拠している。
すなわち動物殺害のあとの贖罪行為は、
洞窟壁画の作者たる旧石器時代人と類似の
生き方をしていると思われる諸種族に
おいても通例になっているという事である。》

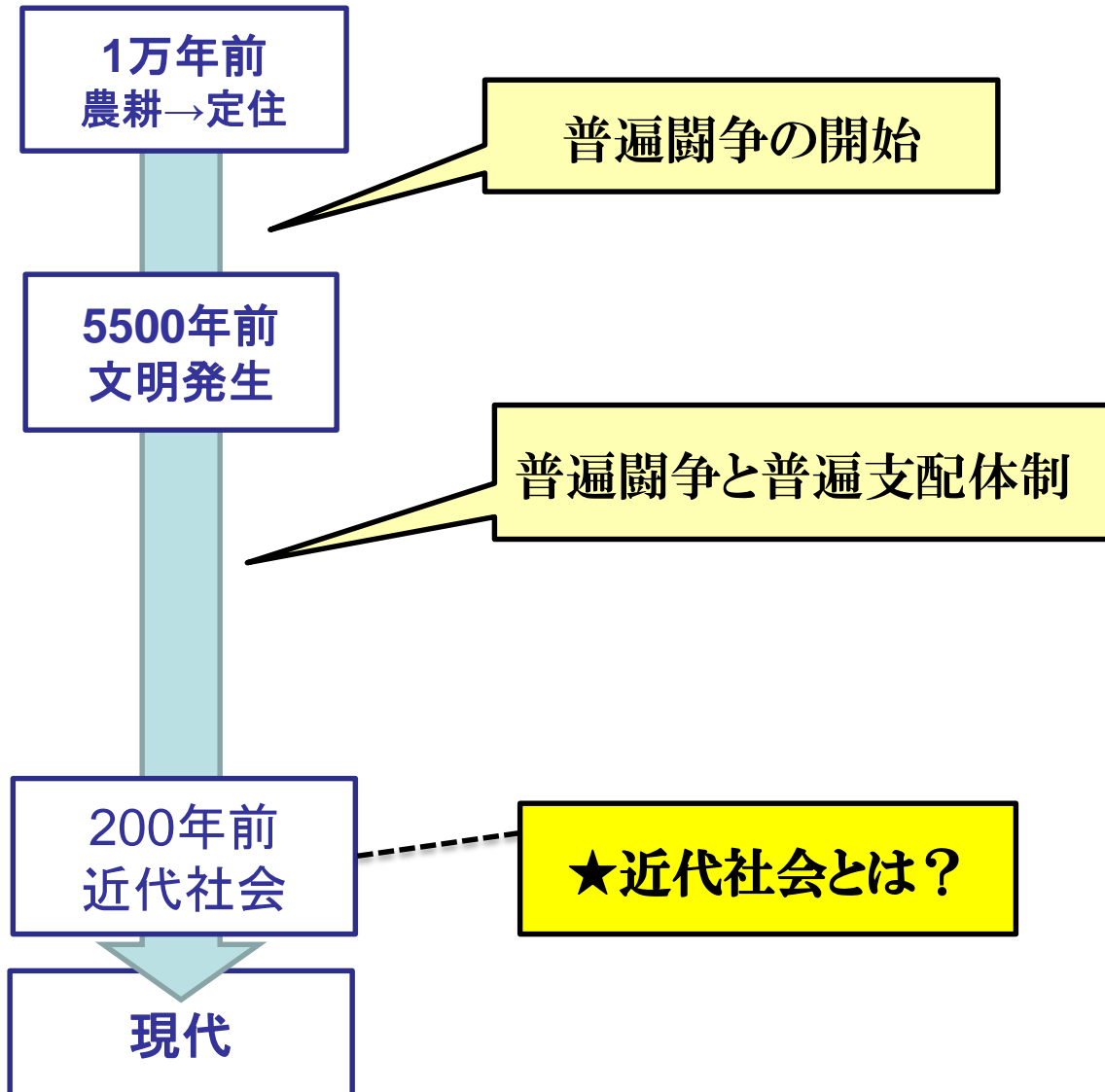


* 普遍闘争史観 ホブズ「万人の万人に対する戦争」 (『リヴァイアサン』)

戦争の原理 → 競争・不信・自負 → 「不安競合」

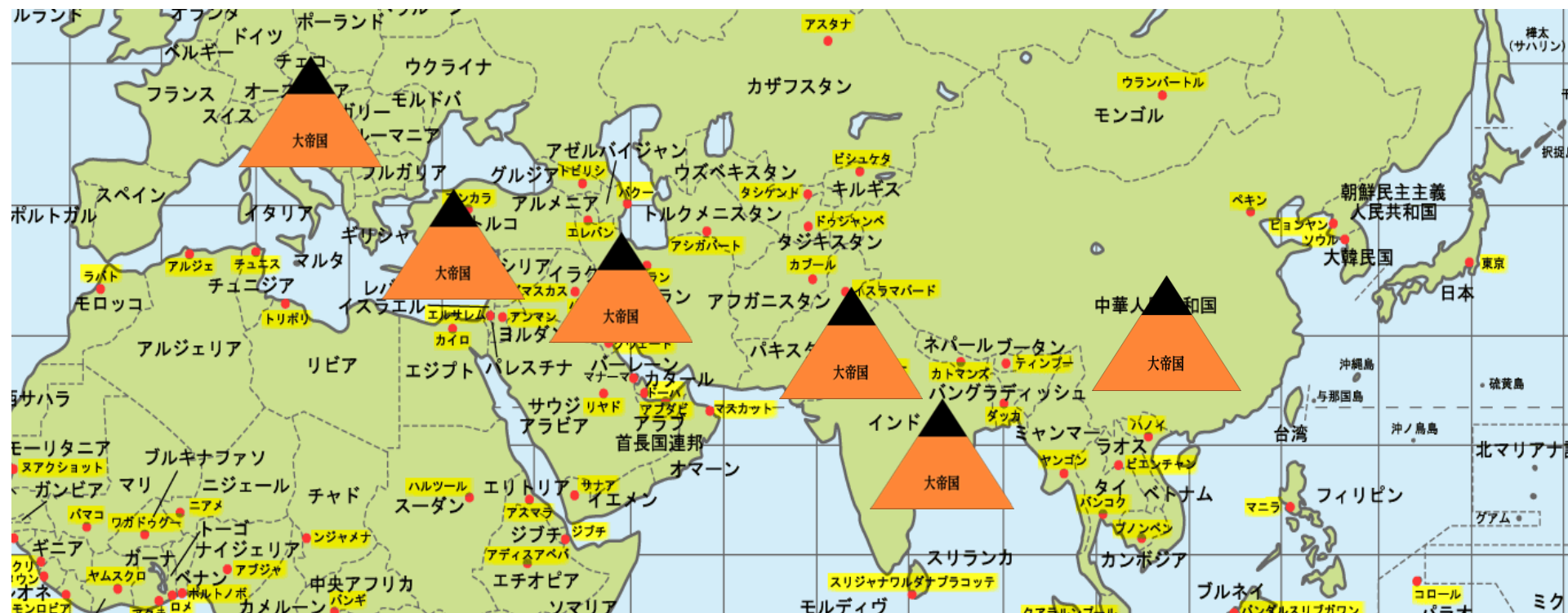
抑制の原理 → 統治システム (権力 ルール ペナルティ・システム)

普遍闘争の歴史



- ①贈与
- ②交換
- ③交易
- ④婚姻
- ⑤宗旨統合
- ⑥?

古代大帝国



① 覇権闘争時代：

初期文明(メソポタミア・夏、殷・エジプト・侵略アーリア人ほか)、
中国の春秋時代、古代オリエントの群雄割拠ほか

② 古代大帝国時代：

エジプト王朝(前2600頃)、ペルシャ帝国(前525)、マウリヤ朝(前317)、
秦帝国(前221)、ローマ帝国(帝政27)

1) 言語ゲームと暴力原理

2) 言語ゲームと現象学

3) 言語ゲームと価値審級形成

「言語ゲーム」について

ウイトゲンシュタイン『哲学的探究』

* 現代言語学における難問(アポリア) → 言語は認識を表現できるか?

① 語の意味の多義性

② 言語ルールの曖昧性 (厳密規定不可能)

* 言語ゲーム論 → 言語本質論

① 言語は、厳密なルール(規定性)をもたない言語ゲーム

厳密な論理学の不可能性

② 言語ゲームは外部をもたない。

言語のルール自体、言語でのみ規定される→「言語ゲーム」

一切が言語ゲームにおいて生成

→ 人間社会、人間世界が言語ゲームによって「構成」されている

○言語と意味の難問(アポリア)

*現代分析哲学→言語の意味の謎

★フレーゲ・ラッセル以降 「論理学の数学化」の試み (言語の厳密規定の試み)

フレーゲ 「宵の明星」と「明けの明星」 同じ「意味」か？

ラッセル 記述理論 「現在の禿のフランス王がいる」→「命題の真偽性」は規定できるか？
「何かが存在する」「一つのもが存在する」「禿頭かつ王である」→論理学的操作にとどまる。

カルナップ VS クワイン →論理主義 vs 言語的相対主義

デリダ『グラマトロジー』 ソシユール批判

ソシユールの言語の形式化を批判→その不可能性を“論証” 脱構築

音声中心主義批判 フッサールの「現前批判」絶対的真理の批判

★ヴィトゲンシュタイン『論理哲学論考』→『哲学探究』 「言語ゲーム」論

- 1) 語は、対象のイメージの喚起ではない。その指示規定(レファレンス)でもない
- 2) 石版！という言葉は、「持ってこい」か「持っていけ」か「手渡せ」か「置け」か？
- 3) ある概念の意味を、厳密規定できない
- 4) 意味の意味は何か、は厳密規定できない

★「ゴルギアス・テーゼ」の現代版 ソフィスト・ゴルギアスの難問

- 1)存在はありえない
- 2)存在があるとしてもそれを認識することはできない
- 3)認識が可能としても、それを言語で表現することはできない

→哲学における「存在の謎」・「認識の謎」・「言語の謎」の出発点

★現象学とは何か？ フッサール現象学の核心

*「認識問題の解明」 主観-客観は原理的に一致不可能？

- ①にもかかわらず客観(真理)は認識できる 実証主義・独断論・形而上学
- ②一切の認識は相対的である 認識相対主義 現代思想(哲学)

*フッサール →認識問題は完全に解明される

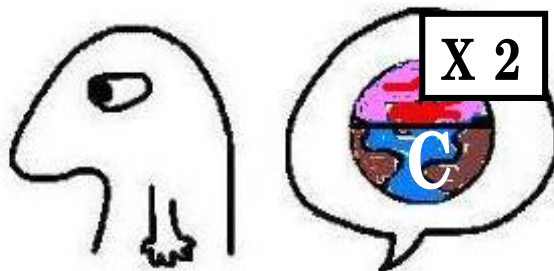
- ①方法は「超越論的還元」 一切の認識を「確信」に還元する
→「客観世界」を前提せず 意識における確信構成の構造の解明
- ②主観的「世界構成」(確信)の構造の解明 →間主観的世界構成の解明へ
1)主観的確信 2)共同的確信 3)普遍的確信
- ③ 超越論的還元の方法から、「本質観取」の方法への展開
- ④「本質観取」の方法から「本質学」の構想への展開

信念対立と共通了解

確信成立の構造
を吟味すると



世界観 B



世界観 C



C: 共通了解の領域

自然科学

数学

基礎的論理学など

X: 共通了解不成立の領域:

感受性・審美性

価値観

宗教

人間観

世界観など

?



哲学のテーブル

真理のゲーム

普遍性のゲーム

共通理解を創り出す
開かれた言語ゲーム



宗教のテーブル

哲学のテーブル

哲学のテーブル

★本質観取の要領

⇒問題設定

- ①その言葉、概念が、どのような経験的本質を指示しているかを自分の経験を内省して考える
- ②この経験の核心を表現する適切なキーワードを、概念の形で示す
- ③ほかの人たちのキーワードと比較、検討。
違いがある場合、その違いの中心が何かを考える。
- ④違いの中から、各人が納得できる新しいキーワードを見出す。(共通理解可能性)
- ⑤共通のキーワードを取り出せない場合、何がその原因かを考えて、その共通理解を見つけ出す。

示教のテーブル

普遍性のゲーム

共通理解を創り出す
開かれた言語ゲーム



哲学のテーブル

★言語ゲームと暴力原理 まとめ

①「普遍闘争原理」

→いかに普遍闘争を抑制できるかは人間社会の最大の課題

②「言語ゲーム」はその可能性の原理

*「宗教」による世界像形成

→「物語」 寓喩説話的世界理説 (ストーリー・アレゴリー・メタファー)

*「哲学」による世界像形成 「原理」「概念」「再始発」

「理性」の厳密使用 理性とは 合理的推論 総合

*哲学から「科学」の方法が

寓喩説話的理説(「物語」「寓喩」)から「文学」が

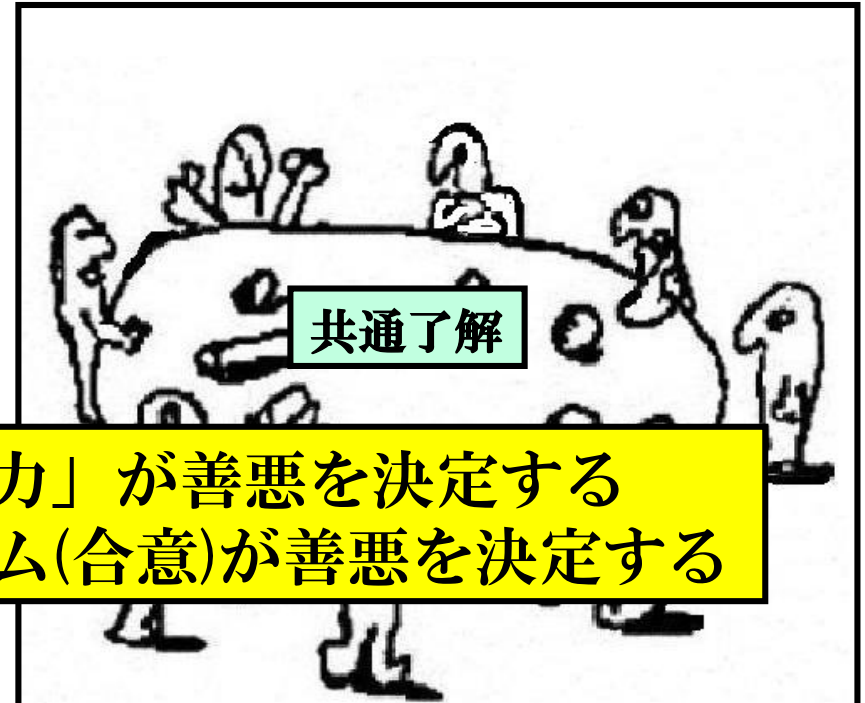
☆人間社会は「言語ゲーム」によって構成される

間主観的世界認識 (共-世界像) の構成

- ① 物理世界の「客観性」は、類身体性による間主観的構成
- ② 関係世界の「客観性」「普遍性」は、意味・価値の間主観的創出

絶対支配の世界

市民社会



★絶対支配の社会では、「力」が善悪を決定する
市民社会では、言語ゲーム(合意)が善悪を決定する

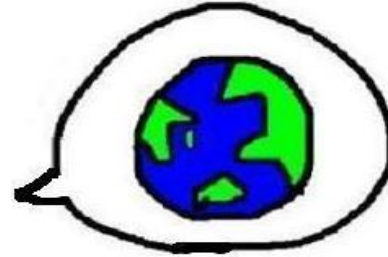
欲望論哲学の根本構想

- (1) 哲学的背景 現代哲学の二極構造
相対主義哲学と現代形而上学
認識問題の不可能性 → 哲学の終焉？
- (2) 本体論の解体と認識問題の解明
ニーチェ 「力相関性」
フッサール 現象学的還元
- (3) 哲学原理論としての欲望論
欲望相関性の原理
- (4) 価値審級論の方法
善悪 美醜 真偽

欲望-身体と世界分節

「欲望相関性」

1) 認識=反映図式



2) 感覚=分節図式



??



欲望相関的分節構造



- ①光覚
- ②嗅覚
- ③温感



分節図式

☆価値審級の発生論

「善悪」「美醜」の審級は言語ゲームの中で形成される

母-子の始発的言語ゲーム

(1) 「泣き」の段階

要求-応答ゲーム



★初期関係

①「泣く」 要求-応答関係

一方向的な要求-応答ゲーム

一方向的な言語ゲーム

母-子の初期言語ゲーム

(2) 「笑い」の段階

「関係感情」の世界

関係的快



笑う

せがむ

あやす



ないないばー

エロスの中心性の転移

★初期関係

② 「泣く」「笑う」「あやす」「せがむ」

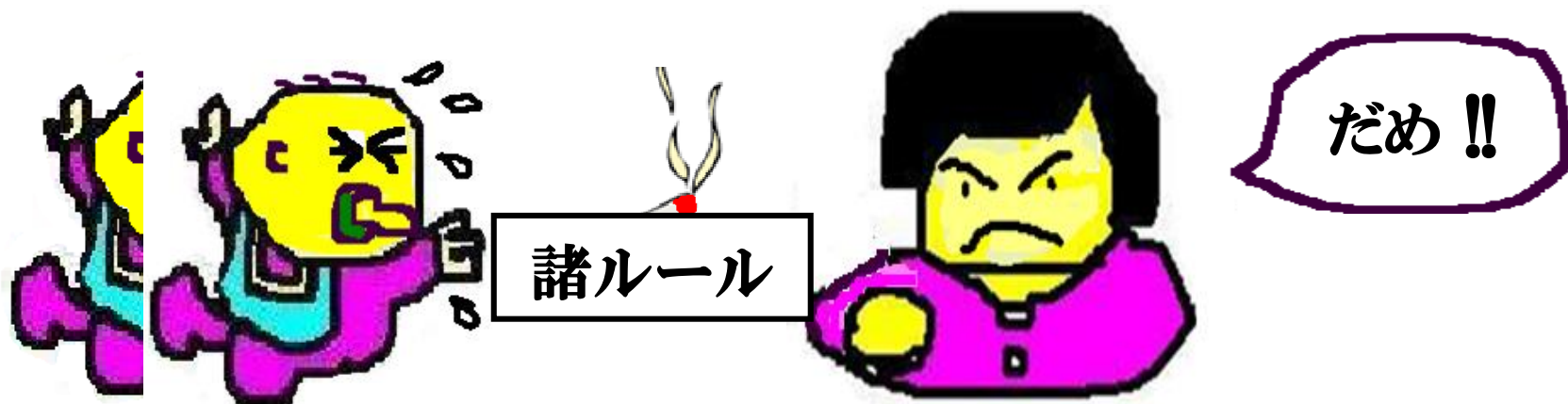
* エロスの中心性の転移

身体的「快-不快」から、「関係感情」の「快-不快」へ 身体世界→関係世界（親和的世界）

母-子の初期言語ゲーム

(3) 「禁止」の段階

逆・要求-応答



★初期禁止

(3) 「禁止」の登場

- ①要求-応答関係の逆転 さまざまルール・規範の交付
- ② 世界の「よい-わるい」分節構造 →対象 行為 領域
- ③ 「よい子」「わるい子」分節

★発生的言語ゲーム

幻想的身体の「発生論」 「発生論的身体論」

◇母-子関係の発生的階梯

①一方的言語ゲーム

* 要求-応答ゲーム 一方的 (子供主導)

「子」(ノイズ)→要求→応答→(充足)→(入眠) (→愉楽要求)

② 「微笑み」「笑い」 エロス応答関係

* (あやす→せがむ→あそぶ) ⇒関係感情と親和世界

③ 「禁止」の登場

* 「よい-わるい」分節の生成 対象→領域→行為

* 許可された世界 (安心) と 禁止された世界 (不安)

③ 相互的言語ゲーム

→内的ルール形成

* 相互的 要求-応答関係 (母親主導)

* よいこと-わるいこと分節 よい子-わるい子分節

* 言語的世界分節

→ 「きれい-きたない」分節へ

★参考文献

竹田青嗣 『欲望論』 (第一巻・第二巻) 講談社



『欲望論』全体構成

第一卷「意味の原理論」

- 第8節 懐疑主義の衝撃
- 第9節 普遍主義の再興
- 第10節 反懐疑論
- 第11節 近代本体論
- 第12節 ニーチェ的「解体」

緒論

第三章 本体論的解明

- 第13節 反現象学

第一部 存在と認識

- 第14節 間主観的確信の構造

第一章 哲学の問い

- 第15節 現象学対存在論

第1節 世界理説の起源

- 第16節 先構成批判

第2節 哲学的始元論

- 第17節 本体論の解体 1
- 第18節 本体論の解体 2

第3節 世界理説の対立

第二部 欲望相関性

第4節 懐疑論——認識と言語の謎

第5節 普遍認識論の試み 1

第四章 欲望相関性

A 欲望と世界分節

第二章 認識の謎

- 第19節 本体と始元論

第7節 客観認識と数学

- 第20節 欲望とエロスの力動

- 第21節 欲望と非知性

B 快と不快

- 第22節 始元的審級としての快・不快
- 第23節 「力への意志」 仮説

C 情動・感情・衝動

- 第24節 知覚、意味、情動
- 第25節 世界の情動的根源性
- 第26節 情動発生と遠隔知覚

第五章 意味 価値 存在

A 意味と価値

- 第27節 価値の本体論
- 第28節 意味の本体論
- 第29節 脱構築的退行
- 第30節 差異と反復の哲学
- 第31節 意味と同一性
- 第32節 内的体験の本質
- 第33節 意味と価値の生成

B 存在と真理

- 第34節 循環問題と本来性
- 第35節 存在論と形而上学
- 第36節 形而上学の贗造
- 第37節 存在問題の終焉

第六章 世界の一般構成

A 現前意識の地平

- 第38節 現前意識
- 第39節 時間論のアポリア
- 第40節 現前の形而上学
- 第41節 「生き生きした今」の構成
- 第42節 情動累積

B 認識対象の本質学

- 第43節 認識の否定神学
- 第44節 認識対象の一般本質
- 第45節 生活世界の一般構成

C 心身二元論

- 第46節 事物的なもの
- 第47節 物理的一元論
- 第48節 「自由」の発見

D 心的存在の構成

- 第49節 他者身体
- 第50節 主権的身体